

## 総持寺祖院の鐘の音・雲水の托鉢



「もんぜんまち 総持寺祖院を訪ねます。しゆぎやうそう修行僧が、ごころい五銚鈴を鳴らしながら町の家々を周ります。まわ禪宗の落ち着いたたたずまいの中には、ふるお古の面影が随所に感じられます。」



かいせつ



総持寺は、元亨元年(1321年)に瑩山紹瑾へいざんしやうこん禪師によって創建された曹洞宗そうどうしゆの大本山です。江戸時代には1万6千もの末寺を誇り隆盛を極めました。明治31年(1898年)の火災により焼失。本山はその後横浜市に移されましたが、広大な山内には伝灯院、経蔵が残り法堂、仏殿、僧堂が建ち、祖院としての威風を今に伝えています。総持寺には、現在でも全国から修業僧が集まり、法衣をまとった修業僧が山内を行き交う風景を日常的に目にすることができます。修業僧の修業の一つに托鉢があり、僧たちは毎月1日と15日の朝や1月下旬～2月上旬にかけて、門前町の町内を歩きます。その際、修業僧たちは手に持つ五銚鈴を鳴らしながら家々を托鉢してまわり、その音を聞いた町の人々は表に出て手を合わせます。また、総持寺では日の出と午前11時、日の入りの1日3回鐘がつかれ、その音が町に響きます。五銚鈴、鐘の音は、文字どおり門前町として栄えてきた町の風景の中に自然と溶け込んでいくかのように感じられます。